

頭浄土真実行文類二(八)

高田短期大学名誉教授 栗原廣海

一、不回向の行

前回、聖人が、称名を「不回向」の行と名づけると言っておられることについて御自釈の文を挙げ、その意味を簡単に考察して稿を閉じました。今回は、この「不回向」についてももう少し詳しく考えてみたいと思います。

前回も言いましたが、この「不回向」は親鸞聖人のオリジナルな法語ではなく、師である法然上人が『選択本願念仏集』のなかで説いておられますので、それによられたものと考えられるのですが、その意味は同じではありません。その違いを考える前に、まず、「回向」の意味について振り返っておきたいと思えます。

『教行証文類』の世界 第九回」のなかです

もし前の正助二行（五正行を二つに分けたもの。正定の業である称名と助業である称名以外の他の四）を修すれば、心つねに〔阿弥陀仏に〕親近して憶念断えず、名づけて無間となす。もし後の雑行を行わずは、すなわち心つねに間断す。回向して生ずることを得べしといえども、衆く疎雑の行と名づく。

を引用し、「この文の意を案ずるに、正雑二行につきて五番の相對あり」と述べて、「正行」と「雑行」について五つの得失が示されます。その五つは、一つは親疎對、二つは近遠對、三つは無間有間對、四つは不回向回向對、五つは純雜對で、「不回向」は第四番目に説かれます。

第四に不回向回向對というは、正助二行を修するものは、たとい別に回向を用いざれども自然に往生の業となる。ゆえに『疏』（玄義分）の上の文にいわく、「いまこの『觀經』のなかの十声仏を称するは、すなわち十願

でに述べましたが、「回向」は、原語（サンスクリット語）は「パリナーマナー」で、「転回する」「変化する」「進む」などを意味します。その漢訳である「回向」は、「回轉趣向」の意とされ、「自ら修めた功德を自らの悟りのために、または他者の利益のためにめぐらし、さし向けること」であると一般的には解釈されています。つまり、「回向」は、一般的には仏道を行わずの行者が、自力で行う行のことを意味しています。

二、法然上人の不回向

では法然上人は、この「回向」を否定する「不回向」を、どこでどのように説いておられるのでしょうか。『選択集』には、「正行（誦誦・觀察・礼拝・称名・讚嘆供養の五正行）」と「雑行（五正行以外のすべての自力諸善）」について、その得失を判別している、いわゆる「二行章」と言われる章があり、このなかで出てくるのです。法然上人が尊崇され、ひとえにその教えによられた善導大師の『觀無量壽經疏』『散善義』の、

十行ありて具足せり。いかんが具足する。
 〈南無〉というはすなわちこれ歸命、またこれ發願回向の義なり。〈阿弥陀仏〉というはすなわちこれその行なり。この義をもつてのゆえにかならず往生を得」と。以上次に「回向」というは、雑行を修するものは、かならず回向を用いる時に往生の因となる。もし回向を用いざる時には往生の因とならず。ゆえに「回向して生ずることを得べし」といえども」といふこれなり。

正助二行と言われていますが、より直接には正定の業である称名のことです。称名を修する者は、回向する心が仮になくても、それは往生のための行いになるというのです。その理由として、善導大師の「六字釈」が述べられます。「南無」は、歸命であり、また、發願回向の義、「阿弥陀仏」は行である。だから「南無阿弥陀仏」の一声の念仏のなかには、願と行とが具わっているというのです。つまり、「南無」という言葉には、浄土に

生まれたいという願いを發して回向するということがすでに含まれている。だから「南無阿弥陀仏」と称えさえすれば、回向を意識しようがしまいが、その称名には、阿弥陀仏に帰依し、浄土に生まれたいという願いと、それを実現するための行とが自ずから具わっている。そういうことだから、行者にとつての大事とは何かと言えば、回向の思いのあるなしは関係なく、ただただ「南無阿弥陀仏」と念仏することだけである。そのほかに往生するための条件など何もない。そこで、称名念仏は「不回向」の行と言われたのです。

それに対して、雑行の場合は、回向心をもって、つまり浄土に生まれたいと強く願い、念じながら行をしなければ、それは往生の行とはならないというのです。しかし常に願心を途絶えることなく持ち続けることは極めて難しいことをもって、善導大師は「疎雑の行と名づく」と言われました。

三、親鸞聖人の不回向

法然上人は、「南無阿弥陀仏」にはすでに回向

について真実の教行信証あり。

と言われているのでした。ここで言われる回向は、「自ら修めた功德を自らの悟りのために、または他者の利益のためにめぐらし、さし向けること」、つまり、仏道を行ずる行者が、自力で行う行ではなく、阿弥陀如来が本願力をもって、自らの徳を衆生にふり向け救うはたらきであるとされていきました。それはつまり、行者からすれば、回向は自らの行、つまり自力ではなく、阿弥陀如来の本願の行、すなわち、「他力」であると理解されていたということですから、行者の立場からすれば、回向を否定し、「不回向」と言うほかないわけです。

「信文類」には、「欲生」を釈して、

まことにこれ大・小・凡・聖、定散自力の回向にあらず。ゆえに不回向と名づくるなり。

と言われます。第十八願に誓われている「欲生」は、阿弥陀如来が衆生を浄土に招き、喚び続けておられる勅命を疑いなく受け容れ、信順してい

心が具わっているから、行者の称える念仏に回向心は要求されないことをもって、「不回向」の行と断じられたのでした。法然上人は、行者の修する行を問題とし、「不回向」を説かれました。それに対し、親鸞聖人は、

明らかに知んぬ、これ凡・聖自力の行に非ず。ゆえに不回向の行と名づくるなり。大・小の聖人、重・軽の悪人、みな同じく齊しく選択大宝海に帰して念仏成仏すべし。

と言われ、同じ「不回向」を説かれながら、行者の修する行について「不回向」を言っておられるのではなく、念仏は行者が修する自力の行ではないことをもって「不回向」と言っておられるという点において、両者には大きな相違が見られます。

振り返りますと、聖人は、『教行証文類』「教文類」の冒頭に、

謹で浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一は往相、二は還相なり。往相の回向

る信心の内容であり、如来より賜った心であって、行者が定善や散善の自力の行によって得た功德を回向して往生を願う自力の欲生心ではないことをもって「不回向」と言っておられるのです。

『正像末法和讃』（第三十八首）に、

真実信心の称名は

弥陀回向の法なれば

不回向となづけてぞ

自力の称念きらわるる

と詠われ、「不回向」の左訓に、「行者の回向にあらず かるがゆえに不回向という」と註釈されています。行も信も、すべて如来からの賜りもの、すなわち弥陀回向の法であるから、お念仏は、行者の側からすれば「不回向」と言うほかないことを、広く念仏の門徒に知らしめたいと願っておられた聖人の思いが、ことばを和らげた「和讃」というかたちで、端的に語られていると言うことができます。